

日大藤沢

平成二十六年 第一回

国語

受験上の注意

- ① 試験開始の合図があるまでこの問題用紙を開いてはいけません。
- ② この問題用紙は16ページあります。
- ③ 試験中に問題用紙の印刷が読みにくかったり、ぬけているところや汚れに気づいたときは手をあげて下さい。
- ④ 解答は解答用紙に記入して下さい。
- ⑤ 声を出して読むはいけません。

※試験終了後、問題用紙は持ち帰して下さい。

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の――線部の、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 故障の原因を子細に調べる。
- ② 暗くなったので家路を急ぐ。
- ③ 彼の意見は的外れだ。
- ④ 日本は法治国家である。
- ⑤ 血相を変えて帰ってきた。
- ⑥ 建物のモケイを使って説明する。
- ⑦ 温泉からユゲが立ち上る。
- ⑧ キリスト教をデンドウする。
- ⑨ 被災地のフッコウを願う。
- ⑩ 兄は四月から会社にツトめる。

問二 次の漢字について、①部首名をひらがなで書きなさい。また、②総画数が同じ漢字をあとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

## 補

ア 害      イ 隊      ウ 築      エ 踏

問三 次のア～カから正しい四字熟語となっているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 異句同音      イ 一石二丁      ウ 半信半疑      エ 森羅万象      オ 一氣一憂      カ 起死回生

問四 次の熟語と組み立てが同じ熟語を、あとのア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 生産      ② 早春  
ア 高山      イ 不足      ウ 天地      エ 価値      オ 県営      カ 気化

問五 次の文を単語に分けた場合、いくつに分けられるか。単語の数を数字で答えなさい。

・あの畑の向こうの建物が僕の通っている学校です。

問六 次の文の――線部が修飾している文節を、ぬき出して書きなさい。

・彼は決してその目標をあきらめることなどしないはずだ。

問七 次のア～エから、敬語の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生はとてもすてきなスーツをお召しですね。  
イ 私から先生におっしゃるようにと父が申しおりました。  
ウ すばらしい作品をご覧させていただき、感謝いたします。  
エ お客様にお知らせします。当社の社長がいらっしゃいました。

問八 次のア～エから「させ」の用い方が誤っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少し考えさせてください。  
イ 幼児に食事を食べさせる。  
ウ 部下に問題点を確認させる。  
エ 私がやらせていただきます。

【二】 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問いの中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

Ⅰ 人間には食性というものがああります。

食性というのは、生物が生きながらえてきた長い歴史の中で、① ということです。

動物の食性は草食性、肉食性、雑食性に大きく分けられますが、同じ種の動物であつても、地域によって捕食する対象が違うため、それぞれに固有の食性を持っています。

人間も同じことで、穀物を中心に食べてきた民族は、そのための身体と消化吸収の仕組みを備えていますし、肉を中心に食べてきた民族もそうです。また、高地に住む民族と、低地あるいは海辺に住む民族との間でも、食性は違っています。

【ア】

日本人の食性としてよく挙げられるのは、米であり、味噌や醤油に代表される大豆です。長い歴史の中で、たとえば他の民族に比べて長い腸を持つなど、私たちは米や大豆からよく栄養をとることのできる消化吸収システムをつくってきたということです。

Ⅱ ところが、近年この日本人の食性が崩れてきたという指摘があります。戦後になって、欧米風の食生活が日本に移入され、それが急速に広まったからです。

私たちはスタミナ切れを感じたとき、欧米風の食事に手を伸ばす傾向があります。がつつり食べたいときは、たいていの人が、ステーキや揚げ物などを選ぶのではないのでしょうか。欧米風の食事はスタミナがつくと思ひ込んでいるわけです。

その理由は、アメリカが食料市場を開拓するために、戦後の日本で大々的なキャンペーンを行ったからでしょう。その結果、私たちは、すっかりそれがいいものだというふうになり込んでしまいました。子どものころから欧米風の濃い味で育ちますから、地味な和食が好きだという大人は、いつまでたっても少数派です。

【イ】

Ⅲ 近年は長寿食、美容食として世界でも日本食が認められるようになりましたが、戦後、新しい文化が入ってきたときには「乳製品をとっていないから大きくなれない」「和食は塩分が多いから胃がんになりやすい」などと、従来の和食スタイルを否定するよ

うな動きもありました。

たとえば、よく日本人はカルシウムが不足しているといわれますが、こうした認識は、和食に対する誤解を端的に示しています。たしかに日本は、他の国に比べて、土壌中に含まれるカルシウムが少ないことで知られています。そのため、カルシウム不足を主張する人たちは、日本人は農作物から十分なカルシウムを摂取することができず、カルシウム不足に陥っているといっています。一時期は、子どもたちに落ち着きがないことも、年配者に骨粗鬆症が目立つことも、すべてカルシウム不足のせいにするような風潮が生まれたこともありました。

【ウ】

本当にそうだろうかと考えてみると、② これは、どうにも腑に落ちない話です。私たちのカルシウム不足が土壌に由来するとしたら、日本人は歴史的に常にカルシウム不足でなければなりません。とすれば、江戸時代や明治時代においても、落ち着きのない子どもたちや骨粗鬆症のお年寄りがたくさんいてはならないはずで

す。A、江戸期の文献や明治時代の記録を調べても、そうした子どもやお年寄りの存在は皆目見当たりません。日本に滞在した西洋人の手による記録もありますが、彼らの目に日本の子どもたちが聡明に映り、年配者がみな働き者に見えても、落ち着きがないとか骨が貧弱などと記した個所は一行ありません。

あるお医者さんに聞いた話ですが、明治時代に土葬された日本人を調べると、体格的には現代人に劣るものの、骨は太くてがつしりしていたといっています。当時の全員がそうだったとはいえないでしょうが、これひとつをとっても、日本人のカルシウム不足説は当たらないといえるでしょう。

B、その昔の日本人は、味噌や醤油などの大豆から、十分なカルシウムをとっていたのでしょう。日本人の食性は、その意味においても③ だったということです。

【エ】

Ⅳ 現在では、日本人のカルシウム不足に対する認識も徐々に改まり、その原因を西洋風の食生活に求める説が有力になっています。たとえば、骨粗鬆症が起るメカニズムは、こう考えられています。欧米風の食事に慣れてしまった日本人は、大豆や小魚などを食べつけなくなったため、食事からとるカルシウムが不足します。

C、塩分過多のファストフードや甘いジュースなどをとることによって食塩や糖分を摂取しすぎると、カルシウムが尿と一緒に排泄されやすくなるため、もともと足りていないうえに、さらに奪われていくのです。過度のストレスも、腸におけるカルシウムの吸収を妨げるものになります。

このような理由により血中カルシウムが不足することになりますが、もしその状態を放置すれば生命を維持していくことができません。そこで、副甲状腺ホルモンが出て、骨に含まれるカルシウムを溶かし、それを血中に供給します。カルシウムは骨を硬くするために欠かせない材料ですから、それが溶け出せば折れやすくなるわけです。

カルシウム不足の食事をつづけている人が骨粗鬆症になるのは、このような生命維持の作用が働くからであり、日本の土壌や伝統食に原因が求められるものではありません。むしろ伝統的な和食は、それを予防するということです。

それぞれに固有の食性を持つ民族は、身体の健康を保つという意味で、食性に合った食物をとることが大切です。ところが、これは日本人にかぎったことではありませんが、食物の工業化が進み、またボーダーレスな社会になったために、自分たちの食性に合った食物をとることが、いまや困難な時代になってしまいました。

これもまた、飽食のなせる業です。食と健康をこのように考えていくと、飽食の問題は、きわめて根が深いといわざるをえません。

(笠井奈津子『甘い物は脳に悪い』による。問題作成に当たり、一部を改変しました。)

\*捕食Ⅱ生物が他の生物を捕らえて食べること。

\*端的にⅡ明白に。はっきりと。

\*骨粗鬆症Ⅱ骨質全体が減少し、もろく折れやすくなった状態。

\*皆目Ⅱまったく。

\*食べつけるⅡ食べ慣れる。

\*ボーダーレスⅡ境界や国境があいまいなこと。

\*飽食Ⅱここでは、何不自由なく食べ物や飲み物を手に入れられる状態のこと。

問一 A C にあてはまる言葉として、適切なものを次のア～カから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア すると イ ところが ウ また エ おそらく オ なお カ たしかに

問二 次の段落は本文中のどの位置に入りますか。【ア】～【エ】から選び、記号で答えなさい。

何を食べてきたのかということが、長い歳月をかけて民族の身体の仕組みをつくっているわけです。

問三 この文章を大きく二つに分けると、次の各問いに答えなさい。

(1) 後半はどこから始まりますか。本文中のⅠ～Ⅳから選び、記号で答えなさい。

(2) 前半と後半の部分に小見出しをつける場合、どのようなものがよいですか。適切なものを次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 新商品への好奇心 イ 身体の不調を訴える日本人 ウ 飽食の社会問題

エ 日本人のカルシウム不足説 オ 日本人の食性について

問四 ① にあてはまる文章として、適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 種を維持するために何を食べてきたのか

イ 種を維持するために何を意識してきたのか

ウ どのような環境が生物に影響を与えてきたのか

エ どのような栄養が生物に影響を与えてきたのか

問五 — 線部②「これは、どうにも腑に落ちない話です」とありますが、それはどういうことを意味していますか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 土壌の性質から考えても日本人がカルシウム不足であることは仕方がないということ。
- イ 歴史的に見ても日本人が常にカルシウム不足であると考えるのは理解できないということ。
- ウ 土壌の性質から日本人がカルシウム不足であると指摘するのは納得がいかないということ。
- エ カルシウム不足のため日本の子どもたちが落ち着きがないと思われるのはやむを得ないということ。

問六 ③にあてはまる言葉として、適切なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 道徳的      イ 合理的      ウ 画期的      エ 実質的      オ 生産的

問七 — 線部④「むしろ伝統的な和食は、それを予防するということです」について次の各問いに答えなさい。

- (1) 「それ」は何を指し示していますか。本文中からぬき出して書きなさい。
- (2) また、そのように言えるのはなぜですか。四十字以上四十五字以内で書きなさい。

問八 — 線部⑤「自分たちの食性に合った食物をとることが、いまや困難な時代になってしまいました」とありますが、その原因として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 塩分が多い和食スタイルを敬遠したから。
- イ 欧米風の食生活が日常的になったから。
- ウ 手間のかかる和食は工業化に向かないから。
- エ カルシウムを摂りやすい乳製品が普及したから。

問九 本文で説明されていることに合っているものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 民族によって食性は異なり、長い時間をかけてそれぞれの民族がそれぞれの食性を育んできた。
- イ 地味な味付けが特徴でもある和食からは、栄養が十分に摂れないと考えられている。
- ウ 日本人の食文化の移り変わりをたどると、急速に欧米風に変わったことが分かる。
- エ 塩分過多のファストフードや甘いジュースが、日本人のカルシウム不足の最大の要因となっている。
- オ 欧米風の食事はカロリーが高く、普段和食を食べている日本人がスタミナをつけるのに適している。

三 次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。問の中で字数に指定のあるときは、特に指示がないかぎり、句読点や符号もその字数に含めます。

高校一年生の中原佐和子は学級委員になり、お年寄りとの交流会のために、毎朝十五分合唱練習を呼びかけるが、クラスの人たちが歌わないことに悩んでいた。ボーイフレンドの大浦勉学から、クラスの男子に頼んでみるように助言され、吉沢を呼び出して協力を頼むことにした。

次の日、いつもより朝早く登校すると、サッカー部の朝練を終えた吉沢君が一人で教室に戻ってくるのを見つけた。

「吉沢君」

「何？」

「ちょっと、いい？」

「いいけど、何？」

「三分だけ。ちょっと来て」

私は吉沢君を四階に上がる階段まで連れて行った。①ここならめつたに誰も通らない。

「どうしたの？」

日頃、話すことがほとんどない私に引っぱられて、吉沢君は困惑していた。

「あのさ……。えっとね」

私は頭の中で、昨日、大浦君と練習した台詞を思い出してみた。えっと、私困っていて、助けてほしいの。吉沢君が頼りなの。一人じゃ無理だから。そうやって I 考えてたら、なんだか涙が出てきた。

情けないなあ。みんながちゃんと歌ってくれないからってなんなんだろう。そんなことでどうしてこんなに悩まないといけないのだろう。大浦君まで巻き込んで、こんなのもちつともだめだ。

「そうだよな……。中原傷ついてるよな」

なかなか言葉を発しない私に、吉沢君が言った。

「へ？」

「毎朝、俺、みんなと一緒にふざけてるけど、中原のこと本当、かわいそうだなあって思ってたんだ」

「……そうなんだ」

「ごめん」

「ううん。いいんだけど、えっと、あのね」

②わかつてる。俺、協力するよ」

吉沢君はそう言って、③私の肩を軽く叩いた。

「俺に相談してくれてありがとう」

「あ、うん」

「他にも男子いるだろう。なのに、中原が俺を選んでくれたって、なんかちょっと嬉しい」

「ああ、そう？ うん。そうなんだ」

「行こうぜ、教室」

吉沢君は階段を下りはじめた。

「えっと、あの、吉沢君だったら、格好いいし、みんなの人気者だし、だから、きっと助けてくれるって……」

大浦君と練習したことを少しはいかさないといけない。私が慌てて言葉を付け加えると、

「わかったから大丈夫だよ」

と、吉沢君は笑った。

増田君と違って、④吉沢君は上手だった。みんなに「ちゃんとやろう」なんてかかったるいことは言わず、「毎日テープ流されちゃうから、俺、この歌覚えちゃったよ。ちょっと、いつペン歌してみようかな」と II ちゃかしながら、歌いはじめた。

「どうどう、俺の歌？」

「結構、うまいじゃん」

「だろ？」

格好いい男子は歌もうまい。<sup>⑤</sup> 吉沢君は確かに上手だった。西田さんみたいな気の強い女子は格好いい男子には弱い。吉沢君達のグループの歌にご機嫌に手拍子<sup>てびょうし</sup>している。

「つていうか、考えてみたら明日交流会じゃん。ちょっとやばくない？ みんなちよい、まじで歌おうぜ。中原、もう一回テープ初めから流して」

「あ、うん」

私は伴奏<sup>ばんそう</sup>をもう一度流した。

誰か声を出す人間がいれば、合唱は成功する。どこかでやらなきゃと思っていた子達は、吉沢君の働きかけでようやく声を出すことができた。みんな毎日伴奏を聞いていたのだ。すんなりと「ふるさと」は歌い上がった。

「格好いい。やつば、吉沢君つて超<sup>ちよう</sup>いかしてるんだよ」

「お前なあ。普通<sup>ふつう</sup>そういう話を俺にする？」

一時間の休み時間、私はすぐに大浦君に報告に行った。

「そつか。でもでも、話したくなっちゃうんだもん。えへへ」

「えへへ。つて気持ち悪いぜ」

「うん。ごめん」

私はすっかりご機嫌になっていた。十五分の歌練習の時間は私にとって<sup>⑥</sup>あまりにも大きなものだったのだ。

「まあいいや。中原にはそういうところ、足りなかったんだろうし」

「そういうところ？」

「他の女子みたいにさ、今日の吉沢君かつこいい。とか、三宅君の髪型<sup>かながた</sup>決まってるよねえとか、数学の清水つてきもい！とか。そ

ういう会話を飽<sup>あ</sup>きずに毎日繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>すポップなところがあれば、こんなにクラスから浮<sup>う</sup>かなかったんじゃないかな」

「そうなのかなあ」

「まあいいじゃん。俺に<sup>⑦</sup>「途<sup>いちず</sup>だから仕方ないよな」

「そうだね。うん。そうだよ」

私は素直<sup>すなお</sup>に認めた。大浦君に感謝している。

三組の合唱がうまくいったのは、吉沢君や私の力じゃない。きつと大浦君がいたからだ。

交流会当日。私達の「ふるさと」は今朝の直前練習を入れてたつた二日間の即席<sup>そくせき</sup>練習だったにもかかわらず、うまくいった。高校生だって、おじいさんおばあさんを前にするとちゃんとする。TPO<sup>\*</sup>をわきまえているのだ。

お年寄りの人々は、つたない私達の歌をいつまでも拍手<sup>はくしゅ</sup>をして喜んでくれた。涙ぐんでいるおばあさんまでいて、私達は少し<sup>⑧</sup>面食<sup>めんじき</sup>らった。<sup>⑨</sup>こんな歌をそんなにも喜べることは、幸せなことなのか寂<sup>さび</sup>しいことなのかよくわからない。

私は何より、無事終わったことにほっとした。もう明日からみんなの前に立たなくてすむと思うと、嬉しかった。高校生の十五分は大人にとっては一瞬<sup>いっしゆん</sup>かもしれない。だけど、その一分はあまりにもリアルでハードだ。

交流会を終え、老人ホームを出ようとした時、「どうもありがとう」と一人のおばあさんが私の手を取った。しわしわの乾燥<sup>かんそう</sup>した手。車いすに座<sup>すわ</sup>ったおばあさんは、しわだらけの顔でまぶしそうな目を私にむけていた。

「いえ、そんな」

「とても……いい歌……でした。すごくいい歌……でした」

おばあさんは言葉が明確じゃなく、それだけを話すのにとっても時間がかかった。だけど、途切<sup>とぎ</sup>れ途切<sup>とぎ</sup>れになりながら伝わった言葉に、私は胸が熱くなった。この何日かが、この言葉で報<sup>むく</sup>われたと思った。

おばあさんは、ただ目の前にいたから私の手を取っただけだ。他にも丁重<sup>ていちょう</sup>にお礼を言われている生徒が何人もいる。だけど、私は本当におばあさんの言葉を、ありがたいと思った。

学級委員じゃなかったら、きつと私だってまともに練習しなかった。周りに合わせて適当にやっていたに違いない。たまたま学級

委員だったから、<sup>⑩</sup>こんな些細なことを深刻にやつてのけただけだ。

もう二度と学級委員にはなりたくない。そう思う。絶対にこんな日々を繰り返したくない。強く思う。それなのに、おばあさんが深々と頭を下げるのが、こんなにも心に入ってくるのは、あの日々が私にあったからだ。

「聞いてくださって、ありがとうございます」

<sup>⑪</sup>私はおばあさんの手を握り返した。

(瀬尾まい子『幸福な食卓』による。問題作成にあたり、一部を改変しました。)

\*ちつともだめだⅡ「ちつともよくない」の意。

\*増田君Ⅱ学級委員の男子。

\*TPOⅡ時と場所と場合。

問一 — 線部①「ここならめつたに誰も通らない」とありますが、佐和子が吉沢君をそういう場所に連れて行ったのはなぜですか。二十五字以上三十字以内で書きなさい。

問二 — I · II にあてはまる言葉として、適切なものを次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア うろうろ      イ へらへら      ウ はらはら      エ ごちゃごちゃ      オ ぺちやくちや

問三 — 線部②「わかつてる」と吉沢君は言いましたが、どんなことを「わかつてる」のですか。簡潔に書きなさい。

問四 — 線部③「私の肩を軽く叩いた」とありますが、吉沢君が佐和子の肩を叩いた気持ちとして適切なでないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 佐和子を励まし、安心させる気持ち。

イ 合唱練習に協力し、交流会を成功させる気持ち。

ウ 自信はないが、佐和子のために強がる気持ち。

エ 佐和子のためにクラスを団結させようという気持ち。

問五 — 線部④「吉沢君は上手だった」⑤「吉沢君は確かに上手だった」とありますが、それぞれ何が上手だったか書きなさい。

問六 — 線部⑥「あまりにも大きなものだったのだ」とありますが、このことを別の部分ではどのように表現していますか。本文中から十五字以内でぬき出して書きなさい。

問七 — 線部⑦「一途」⑧「面食らった」の意味として適切なものをそれぞれのア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

⑦ 一途      ア 他を顧みないでひとつのことだけを追い求めること。

イ 相手のことを考えずに、熱心に言い寄ること。

ウ 誰よりも心が通じ合う、一番の親友だということ。

エ 同じグループの一員だということ。

⑧ 面食らった      ア がっかりして落ち込んだ。

イ 嬉しくて涙ぐんだ。

ウ 感動してうきうきした。

エ 驚いてまごついた。

問八 — 線部⑨「こんな歌」の「こんな」はどのような歌のことですか。本文中から十字以内でぬき出して書きなさい。

問九 — 線部⑩「こんな些細なことを深刻にやつてのけたただけだ」というのはどういう気持ちですか。適切でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア たいしたことではないのに、真剣に取り組んでやり遂げたという気持ち。

イ 本来ならこんなことを真剣にやらなかったのに、学級委員だから義務でやつただけだという気持ち。

ウ たった二日しかもともに練習しなかったのに、合唱がうまくいったのでほっとする気持ち。

エ クラスの生徒が協力して、短い時間でもやり遂げたのは自分の努力の賜物だと思ふ気持ち。

問十 — 線部⑪「私はおばあさんの手を握り返した」とありますが、そのときの佐和子の気持ちとして適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学級委員としてみんなに合唱練習を呼びかけてもうまくいかず、つらい日々だったが、その経験があったから、おばあさんに喜ばれたことを嬉しく思う気持ち。

イ 二日間しかもともに練習しなかったのに、当日はおばあさんたちに感謝されるような合唱ができたことを、学級委員として誇らしく思う気持ち。

ウ ふだんはふざけてばかりいて不真面目な生徒たちが、いざとなったら団結して合唱練習に励み、すばらしい結果を残したことに感動する気持ち。

エ みんなの協力が得られず泣いてしまったことが、かえって学級委員の仕事をきちんと果たすことにつながり、おばあさんに感謝されるようになったことに感動する気持ち。

問十一 本文の内容と合っているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア すばらしい合唱ができて、お年寄りにお礼を言われたのは自分が努力したからだ佐和子は思っている。

イ 佐和子は吉沢君の協力以上に、大浦君の助言が交流会を成功させる要因だったと考えている。

ウ 吉沢君を中心とした、非協力的だった生徒たちは、お年寄りに感謝されたことで自分たちの態度を反省した。

エ 佐和子に泣いて抗議されたことで、吉沢君は自分の態度を改め、率先して合唱練習をしたので交流会は成功した。

Figure 1 is a line graph showing the percentage of respondents who believe that the use of force is justified in various circumstances. The Y-axis represents the percentage of respondents (0 to 100). The X-axis represents the circumstances (0 to 100). The graph shows a decreasing trend in the percentage of respondents who believe that the use of force is justified as the circumstances become more severe.

□